



Data

監督: イェンス・ヨンソン

出演: イングリッド・ボルゾ・ベル
 ダル/ロルフ・ラスゴード/
 アレクサンダー・シェーア/
 ダミアン・シャベル

👁️👁️ みどころ

「スパイもの」が面白いなら、「二重スパイもの」は更に面白い！それが妥当することは、『寒い国から帰ったスパイ』（65年）、『二重スパイ』（03年）、更には、劇団四季の『李香蘭』等を観れば明らかだ。また、本作と同じ“ナチスの女スパイ”を描いた『ブラックブック』（06年）はスリリングな物語はもとより、美人度やエッチ度でも超名作だった（？）が、さて本作は？

「二重スパイもの」は人物関係図が複雑・怪々。それが面白さの源泉だが、下手をするとそれが難点にも！さあ、本作は？

映画は勉強！あらためて情報公開制度の存在に感謝！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 「スパイもの」以上に、「二重スパイもの」は面白い！ ■□■

「スパイもの」が面白いのは、『007』シリーズをはじめとする多くの名作を見れば明らかだ。したがって、「二重スパイもの」になると、さらに面白いのは当然。そして、「二重スパイもの」は、朝鮮戦争後に南北に分断された朝鮮半島や、東西冷戦下で東西に分断されたドイツが最高の舞台。したがって、韓国映画の『二重スパイ』（03年）（『シネマ3』74頁）や、ハリウッドの『寒い国から帰ったスパイ』（65年）が面白かったのは当然だ。

しかし、二重スパイが暗躍する舞台はそればかりではない。近時はイギリスの二重スパイを描いた『ジョーンの秘密』（18年）が面白かった。また、古くは本作と同じく“ナチスの女スパイ”だが、実はオランダの「二重スパイ」だったエリス・デ・フリースをヒロインにした名作『ブラックブック』（06年）も面白かった。私は同作を星5つとしたうえ、12ページにわたって絶賛した（『シネマ14』140頁）が、それは、同作のスリルとサスペンス、そして意外性タップリの面白さに感銘したからだ。私が本作を絶賛したのは、その他にも、ヒロインの美人度やエッチ度も大きく影響していたが、さて、それを含めた本

作の面白さは？

■□■女優はスパイ業に適任？そりゃそうかもしれないが■□■

トラシに「歴史の裏側に隠された驚愕の実話」の文字が躍る本作は、「第二次世界大戦中、ナチス占領下のノルウェー 女優として活躍しながらスパイとして生き抜いたソニア・ヴィーゲットの真実の物語」だ。北欧4国、すなわちデンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドと、ナチス・ドイツとの関係について、私は昔は全然知らなかったが、『ヒトラーの忘れ物』（15年）（『シネマ39』88頁）、『ヒトラーに屈しなかった国王』（16年）（『シネマ41』未掲載）、『アンノウン・ソルジャー 英雄なき戦場』（17年）（『シネマ45』94頁）の鑑賞によって多くを学んだ。しかして、本作が描くナチス・ドイツ占領下のノルウェーと、中立を保っていたスウェーデンとの関係は？パンフレットには池上佳助（東海大学文化社会学部北欧学科教授）のコラム「ドイツ占領下のノルウェーと中立のスウェーデン」があるので、これは必読だ。

ソニア・ヴィーゲット（イングリッド・ボルゾ・ベルダル）はノルウェーで活躍する女優だが、彼女をスパイとして使おうと考えたのは、スウェーデンの諜報部員トルステン・アクレル（ロルフ・ラスゴード）。彼がソニアに与えようとした任務は、スウェーデンで暗躍するスパイ“マリア”の動静を探ること。しかし、すでにその任に当たっていたアクレルの配下のスパイだった“ミスC”は遺体で発見されていたから、その任務の危険性と困難性は明らかな。いくら語学に堪能で、演じる能力に長けているため、スパイの資質ありとアクレルから見込まれたとはいえ、諜報部員としての訓練を何一つ受けていないソニアに、そんな任務が務まるの？そして、ソニアはその申し出をOKするの？

■□■なぜスパイに？更に、なぜ二重スパイに？■□■

『ブラックブック』のヒロインたるエリスがレジスタンス側のスパイになった動機は、ナチス・ドイツによって殺された家族の復讐のためだった。しかし、ソニアはそうではない。女優であるソニアの仕事仲間には、映画監督のライフ・シンディング、演劇仲間のヴィブセン、ノルウェーの劇作家のグレディッチのような、レジスタンス活動に従事する者がたくさんいたが、彼らは、ある意味ノンポリで自由奔放に女優として生きているソニアに反発を感じていた。また、ソニアの父親シーヴェルは筋金入りのレジスタンスだったから、今ソニアが親ナチス映画の大作『エルサ』の主人公として出演するために、ナチス占領下でノルウェーの傀儡政権を操っている国家弁務官のヨーゼフ・テアボーフェン（アレクサンダー・シェーア）と親しくすることに反対したのは当然だ。しかし、ソニアは祖国が置かれている政治的状況以上に、自分の女優としての生き方を優先していた（？）から、そんな声、批判を無視して女優活動を続けていた。

そんなソニアの魅力に目をつけたうえ、彼女を“ナチスの女スパイ”に仕立て上げようとしたのが、テアボーフェンの部下で、保安警察及びSD（親衛隊情報部）司令官のフェリスだ。ソニアの魅力にぞっこんのテアボーフェンは、ソニアをナチスの女スパイに仕立

て上げるのみならず、奪取した皇太子の邸宅に住まわせて、“自分の女”にしようとしたが、さあ、ソニアはどうするの？

他方、ソニアの映画仲間のみならず、父親まで逮捕されたことを受けて、スウェーデン側のスパイになれば父親の釈放を保証すると再度申し出たのが、前述したアクレル。もし、その申し出を受ければ、ソニアは“ナチスの女スパイ”から「二重スパイ」になるわけだが、そんな“変身”が危険なのはわかりきったこと。さあ、ソニアはどうするの？

■□■マリアを探せ！それが任務だが、物語は複雑・怪々！■□■

「スパイもの」は、もともと人物相関図とストーリーが複雑だが、「二重スパイもの」になると、それがさらに増幅するのは当然。映画関係の友人たちに圧力がかけられたならまだしも、病気持ちの父親まで逮捕されてしまった今、アクレルからその釈放を保証されたソニアが、渋々(?)「ナチスの女スパイ」から「二重スパイ」への転換を引き受けたのは仕方ない。しかし、そんなソニアに与えられた「マリアを探せ」という最初で最後の任務はめちゃ難しいものだったから、遅々としてその成果が上がらなかったのは仕方ない。

本作のストーリーの大半は、スウェーデンで暗躍するスパイ“マリア”を探せ！という任務に沿って展開していくが、そのキーマンとして、ソニアの恋人となるハンガリー大使館の外交官であるアンドル・ゲラート(ダミアン・シャペル)が登場する。また、スウェーデンのパーティーにたびたび現れ、ソニアの歌を楽しみにしている男フォン・ゴスラー男爵も謎の人物として登場してくるので、本作のストーリーはわかりにくい。というより、奇々怪々だ。そのため、本作のパンフレットには、「熾烈な情報戦の渦中にいたソニアを中心に、登場人物の関係を整理」するための「CHARACTERS」があるが、これを読んでしまっただけでは逆に興覚めとなってしまう。したがって、ミステリー性と真相のバランスを保つのは難しい。

さまざまな諜報活動の中で、ソニアは恋人のゲラートが“マリア”ではないかと疑っていたが、急速に事態が進行していく中、ある人物からの依頼で海岸や港の写真を撮影していたカメラマンである友人のパトリックが殺されてしまったから、アレレ・・・？さあ、本当の“マリア”はいったい誰？“マリア”の正体は意外にも・・・？

■□■映画は勉強。そのためにも情報公開を！■□■

映画は勉強。それが私の持論だが、本作でソニア役を演じた女優イングリッド・ボルゾ・ベルダルもそれは同じだったらしい。つまり、1980年にソニアと同じノルウェーで生まれた彼女も、ソニアの二重スパイとしての活動は全く知らず、本作でその役を演ずるために多くの資料を勉強したとのことだ。そんな“ナチスの女スパイ”で、実は「二重スパイ」だった女ソニアの物語に目をつけたイェンス・ヨンソン監督は、「本作はソニアの視点で描き、最終的に、映画館の観客に衝撃を与える作品にしたい」と思ったようだ。

しかし、スパイは本来、影の存在。それは、伊賀や甲賀の忍者と同じで、本来、女優であるソニアが、スパイとしていかなる活動をしていたかが表に出ることはなかったはず。

にもかかわらず、それが公になったのは、“ナチスの女スパイ” だったはずのソニアが実は「二重スパイ」だったことを知ったナチス・ドイツが、1943年にソニアに関するウソの情報を流布したからだ。そう聞いて思い当たるのが、日本と中国の架け橋としていた活躍した女優・李香蘭（山口淑子）が、戦後、二重スパイ＝漢奸とされた事件。これは、劇団四季のミュージカル『李香蘭』として有名だが、李香蘭（山口淑子）と同じように、戦後、ソニアが女優として厳しい立場に立たされたのは当然だ。

そんな二重スパイとしてのすべての真実が判明したのは、彼女の死亡から25年を経過した後の2005年に、スウェーデンの情報機関がソニアのスパイ活動に関する文書を公開したためだ。なるほど、なるほど・・・。

しかして、チラシでは、“二重スパイ” ソニアについて次のとおり解説されているので、これは必読！

ソニア・ヴィーゲット Sonja Wigert (1913-1980)

1913年にノルウェーのノトデンに生まれる。ノルウェーの国立工芸・芸術産業学校を卒業後、1934年に女優デビュー。1939年にスウェーデンの作家トルステン・ビルガー・アレクシスフォルデンと結婚し（後に離婚）、スウェーデンでも活躍するようになる。第二次世界大戦中にスウェーデンの諜報部に協力してスパイ活動に従事。戦後も女優として活動し、ノルウェー、スウェーデン、デンマークなどで多数の演劇や映画に出演。晩年はスペインのラルファスデルピで暮らし、1980年にその地で亡くなった。2005年に関連文書が公開され、戦時中のスパイ活動が公表された。

さらに、パンフレットには、「歴史の裏に隠された女優 ソニア・ヴィーゲット」があるので、更に勉強したい人はこれも必読！

2020（令和2）年9月23日記